真珠（要約）

何世紀もの間、伊勢志摩では真珠貝から天然真珠を収穫してきました。天然真珠は『人魚の涙』として尊重されることもあるなど、貴重なものでした。1800 年代後半、研究者たちは真珠の養殖を試みました。1893 年、鳥羽生まれの御木本幸吉（1858～1954）は世界で初めて半円真珠を育てることに成功しました。それに続く見瀬辰平(1880～1924）や西川藤吉（1874～1909）の努力により、彼らにも特許を得たほか、真円真珠の発展につながりました。第二次世界大戦の前でも、伊勢志摩の真珠は高く評価され、日本だけでなく欧米でも販売されました。現在、伊勢志摩には真珠産業に関わる会社が数百社あります。

養殖真珠をつくるには、まず貝の中に核を挿入します。核は真珠層（真珠をつくる液体）によって包まれていきます。１～２年ほどをかけて、真珠ができます。真珠を貝の中でうまくつくるには、細心の注意と技術が求められます。伊勢志摩の穏やかな湾や温暖な気候は真珠貝にとって最適な条件です。

伊勢志摩国立公園を訪れる観光客は、真珠の取り出しに挑戦したり、真珠のネックレス作りのワークショップに参加したりして、この地域の遺産をじかに体験できます。